

神の道化として——『闘技者サムソン』の一つの読み方

飯 沼 万里子

ミルトンの『闘技者サムソン』はさまざまな観点から論じられてきた作品である。¹⁾ 盲目の主人公に作者の姿を重ねあわせて自伝的に読み、辛辣な苦々しい調子の中に作者の革命体験を見ようとするもの、作者の前置きに忠実にギリシャ悲劇の観点から、特にソポクレスの『コロノスのオイディプス』との比較において見ようとするもの、あるいは全くキリスト教的見地から見ようとするもの、それには例えばサムソンをキリストの予徴とする見方がある。又劇の進行に Christian regeneration の五つの段階を見ようという考え方もある。これらの見方すべて、いやこれ以外のさまざまな見方も含めた総合的存在が『闘技者サムソン』であるといえるし、それぞれの読者に、それぞれの観点からの見方を許す作品であるともいえるであろう。そのような作品であることに力を得て、私も私自身の一つのさ、やかな見方をここに展開したいと思うのである。それがどういうものであるかを、誤解を恐れずに一言でいうと、「フールとしてのサムソン」を探りたいということである。フールとは何かという定義を後に譲り、私にこの方向への示唆を与えたのは、John Broadbent と Robert Hodge 編注による *Samson Agonistes* の解説にみえる、サムソンは周縁的存在であるという一行であった。²⁾ その後、山口昌男氏のいくつかの著作から断片的知識を得て、³⁾ 私自身のサムソン像を発展させてきた。ところで、怠慢のそりを免れえぬことであるが、Anthony Low の *The Blaze of Noon* を読む機会を最近得ることができた。その第三章、'The Tragic Patterns' における詳細なサムソン像分析は当を得たものであり、私がこれから行おうとすることを十分含んでいる。それにもかかわらずなお自説について考えを述べようとするのは、拙稿において Low とは違った観点からアプローチをし得るかもしれない、そうすることで Low に附加え

るものがあるかもしれないという期待があるからである。Low の論文に力を得たことは言うまでもない。

『闘技者サムソン』において、特に前半において、顕著な特徴として読者を打つのは、光と闇とに対する言及であり、サムソン自身が、その対立する場となっていることであろう。サムソンはすでに登場の時点において盲いて足どりのおぼつかぬ存在である。アンティゴネに手を引かれて登場する『コロノスのオイディプス』の盲目の元テーバイ王の暗示をここに見たとしても不思議はない。そしてサムソンの両の目から光が奪われたことに対する嘆きはほとんど執拗といっているほど、サムソン自身と、コーラスとによって繰返し述べられる。あまりに有名な個所ではあるが、サムソンの言葉を引用してみよう。⁵⁾

O dark, dark, dark, amid the blaze of noon,
Irrecoverably dark, total Eclipse
Without all hope of day!
O first created Beam, and thou great Word,
Let ther be light, and light was over all;
Why am I thus bereav'd thy prime decree?
The Sun to me is dark
And silent as the Moon,

(80—7)

光が完全に奪われていることを 'total Eclipse' とたとえ、つづく詩行の中で、自らの存在を 'My self, my Sepulcher, a moving Grave,' (102) と嘆く。彼は盲目であるばかりでなく、今は牢獄につながれる身であれば、二重に闇に閉ざされており、彼にとっての闇はさらに濃く、輝く光との距離は遠いということになる。肉体的な闇は同時に精神的な闇をも意味する。彼の絶望の闇は深く、彼の魂が天上の光をめざして旅立つ、regenerationの旅の長く困難なことを思わせる。コーラスはサムソンの姿を眺め、かつては彼等の英雄

であった者のみじめな状態を確認する次のような言葉を述べる。

Thou art become (O worst imprisonment!)
The Dungeon of thy self; thy Soul
(Which Men enjoying sight oft without cause
complain)
Imprisond now indeed,
In real darkness of the body dwells,
Shut up from outward light
To incorporate with gloomy night;
(155-61)

光と闇の対立というイメージはどの時代のどこの国の文学にも普遍的なものではあるが、肉体の闇に閉ざされた魂が光を求めて上昇するという考え方は、まさにルネサンスの思想を代表するパターンであろう。事実、サムソンがかくまで彼の視力の失われたことを嘆くこと、闇の深さに自らの絶望を重ねることは、裏返せばいかに彼が光に憧れているかということであり、彼は光を求めて上昇していかなければならない。しかし彼の嘆きの執拗さに、光と闇との間の距離、落差の大きさの方に読者の目は向けられがちである。この距離の巨大さ、そして、上昇よりは、最も高いところから最も低いところへ下落という意味での落差というものが、少なくとも『闘技者サムソン』の前半での重大なテーマではないかと思われる。

登場直後のサムソンのせりふの中で、彼の精神は休まることがない、‘restless thoughts’ が ‘a deadly swarm Of Hornets armd,’ (19 - 20) のように常に襲いかかり、現在のこと過去のこと、あるいは過ぎし日の姿、現在の我身をかたときも忘れさせてくれないと言う。サムソンにとって、何よりも落差の大きいもの、それは過去と現在の彼自身の姿なのである。過去の栄光の座から現在の奴隷に等しいとらわれの身への転落こそが無念であり、いくら嘆いても嘆き足りぬことなのである。その誕生は二度にわたって天使によって予言され、偉業をなしとげるためにわざわざ神によって選ばれたはずのサムソンが、なぜ足枷をはめられてひき囚をまわさなければならないのだろうか。‘O glorious strength Put to the labour of a Beast, debas’t Lower then bondslave!’ (36-8) という嘆きは、輝く栄光から奴隷よりみじめな姿への落下という中に、光から闇へというイメージをも暗示している。イスラエルを解放するために神によって与えられた力を、奴隷の仕事に、それも敵を利するために使わねばならないのが彼の現在の姿であり、これ以下

に落ちようのない最も深いところにまで落ちていることを彼は自覚している。

Inferiour to the vilest now become
Of man or worm; the vilest here excell me,
They creep, yet see, I dark in light expos’d
To daily fraud, contempt, abuse and wrong,
Within doors, or without, still as a fool,
In power of others, never in my own;
Scarce half I seem to live, dead more then half.
(73-9)

今は人にしろ虫にしろ、彼より劣った存在はない。その上盲目の身で敵による詐欺、侮蔑、悪口、虐待にさらされ、他人の手にとられ他人の意のままである我身は ‘fool’ のような存在であるという。

サムソンが ‘fool’ という言葉で意味しているのは単に「愚か者」ということであるかもしれない。しかし西洋の歴史の中においてフールという独特の存在があったことを考える時、ここに単なる「愚か者」以上のニュアンスをくみとることは不可能なことであろうか。まして後に引用するように、この作品の前半におけるサムソンのせりふの中には foolish ‘fool’ という言葉が目立つという場合、それらの言葉が積み重なることによって暗示するものが何であるかを前もって見きわめておくべきであろう。

fool という言葉はフールと仮名で表現して道化と訳さない方が良いのかもしれないが、Enid Welsford の *The Fool* は『道化』という訳を与えられており、⁶⁾ William Willeford の *The Fool and His Scepter* は『道化と笏杖』となっている。⁷⁾ 勿論これらの著作の翻訳以前に道化という言葉はすでに山口昌男氏の多くの著作によって生き生きと一人歩きしていたのであるが。⁸⁾ そうであるが故にかえって道化という言葉を用いることのむつかしさが存在するわけである。⁹⁾ イーニッド・ウエルズフォード及びウィリアム・ウィルフォードはそれぞれの著作において道化の歴史、その及ぶ範囲に関して詳細な論述を行っているが、両著作の中心を占めているのは宮廷における道化、職業的道化、それを暗示する独特のまだらやの衣裳、独特の帽子、笏杖といった道化的イメージを喚起する存在についてである。私がサムソンと道化を結びつける時、そのような道化のイメージを幾分か含みつつ、それだけではない何かを意味してくれるものであってくれればと願うのであるが、それは大変困難である。又山口昌男氏の最も得意とする分野であるトリック・スターという

方向へも、世界をひっくりかえす力を持つという点でのみかすかに共通点は見出せるものの、進んでいくわけにはいかない。¹⁰⁾ 機知で自らを売り込み、人々を笑わすことで存在を主張するという道化の本質を否定して、なおフールという言葉に意味を求めることは矛盾しているようであるが、つまりまず何よりも愚かであり、それ故に人々に嘲笑される存在という根源的な意味においてのフールという意味で使用したいと考えている。ウィルフォードがその著作の第二章「フールの基本的特性」において論じているような、肉体的奇形、衣裳、心的偏奇をも含めて、身体的あるいは精神的に異常な存在という意味にとりたいのである。¹¹⁾

身体的異常ということになるとサムソンはまさに打ってつけの存在である。盲目であるとは、神の属性である光に向けて開かれている、人間の肉体の持つ唯一の機関、目を奪われているということである。それ故にかえって正常な存在には与えられない特別な能力が与えられているのだと、常に象徴的に考えられてきたのが盲目であった。身体的に欠ける部分はかならず補われ、補われた部分こそは常人の持ち得ぬものである。従ってあがめられそして恐れられる周縁的存在となっていくのである。精神的異常ということも同様に考えることが可能であろう。ここに狂気という言葉を持ち出すことは、道化という言葉以上にためらわれることである。サムソンを狂気とは誰も呼べはしない。登場の第一歩から、後に勝利とともにもたらされた死の場面に至るまで、サムソンが常に正気であることには何の疑いもない。しかし狂気ということも避けて通ることのできないものと思われる。十六世紀、十七世紀にあってサムソンがヘラクレスにたとえられる、いわゆる典型的英雄であったとすれば、そこに狂気の影がついてまわるのは当然だからである。ギリシャ的英雄たちの陥る狂気、プラトンの言う *divine madness* の意味するものは激しい怒り、悲しみをも含むかなり広い範囲のものである。しかしヘラクレスの陥ったものは、嫉妬した神の介入によるとはいえ、まさに狂気である。アイアスについても同様である。ソポクレスの『アイアス』を読む時、精神状態に限ってではあるが、同じ作者による『コロノスのオイディプス』よりも、主人公にサムソンとの類似を見ることができるようと思われる。¹²⁾ 激しい悔恨と、自己を嘔みつづけついには死をひたすら願う点においてである。同じ作者による『ピロクテテス』の主人公との共通点については *Anthony Low* の指摘もあるが、¹³⁾ 他者に対する不信、孤立感

を示している。ピロクテテスにあっては、毒蛇による足の傷という身体的欠陥が彼を嫌悪すべき対象にならしめているのだが、それは同時に彼自身の他者に対する不信、孤立感の象徴ともなっている。しかもこの身体的欠陥は、彼が弓の名手であるという稀な資質と表裏一体のものなのである。このような英雄たちを他の人々から遠ざけているものが狂気であれ身体的異常であれ、それらが彼等を周縁的存在におしやっているのである。しかしそれらの異常を得るまでは彼等は英雄であり、王者であった。まさに中心から周縁への距離は無限でありながら、転落は一瞬、実に容易であった。彼等の栄光の座から現在の人に疎まれる立場までの距離は、彼等が感じているほどに遠いものであったのかどうか、彼等の現在の孤立感のはかって栄光の座にあった時にも、感じられこそしなかったが、彼等を取りまいていたものではなかったのだろうか。この同じ疑問はサムソンに対してもやがて発せられなければならないだろう。彼は旧約世界からのヘブライ的英雄ではあるが、古典が復活されたルネサンスを経て、十七世紀にギリシャ悲劇の形式をとって書かれた作品の主人公として、登場してきているのであるから。

再び本文にもどって詳しく論じていきたいのであるが、このように長々と論旨からそれてまで定義したいと思ったフールという言葉の輪郭を、はっきりとさせることができなかったことは残念である。この言葉の背後に控えているものの手強わさには、歯が立たなかったということであるかもしれない。

サムソンは日毎、詐欺、侮蔑、悪口、虐待にさらされ、他人の意のままに動かされている自分自身を ‘fool’ と感じとったが、それではコーラスの目にはどのようにうつたであろうか。彼等はサムソンを目の前にして驚きの声を次のようにあげる。

O change beyond report, thought, or belief!
See how he lies at random, carelessly diffus'd,
With languisht head unpropt,
As one past hope, abandond,
And by himself giv'n over;

(117—21)

つづいて彼等が ‘Or do my eyes misrepresent? Can this be hee,’ (124) と全く信じられない様子をみせるほどにサムソンの姿は変り果てているのである。ぐったりと寝そべり、頭をうなだれて、全く絶望しきっており、身にあわぬ汚れたボロボロの奴隷の着物をまとっている。同情をもって彼を見ている同郷の

彼等でなければ、サムソンの姿は嫌悪の対象でしかない。その嫌悪の念をあからさまに見せるのは後半に登場するハラファである。すでに絶望から立ち直っているサムソンはハラファの侮辱に満ちた言葉をあなどり、挑戦の言葉を投げ返すので、我々は思わず見のがしがちであるが、ハラファの眼前の男は、彼が噂にきいた数々の手柄から想像してきた姿とは似ても似つかぬまさに奴隷そのもの、足枷をつければ共にひき臼をひくにふさわしくはあっても、ペリシテ人の英雄と自負するハラファが剣をまじえれば、その剣の汚れとなろうような存在なのである。‘a Man condemn'd, a Slave inrould, Due by the Law to capital punishment’ (1224-5), ほとんど人間以下の存在、問題にもならぬ存在とハラファの目にはうつる。サムソンがいかに落ちたかは、悪意しか持たない敵の目には歴然たるものである。では再びコーラスの言葉にもどって、彼等がどのようにサムソンの下落を認めたかを見てみよう。

By how much from the top of wondrous glory,
Strongest of mortal men,
To lowest pitch of abject fortune thou art fall'n.

(167-9)

彼は栄光の最高点から、これ以下はない最も低いところへ落ちたのである。‘the spear of fortune’ (172), 「運命の車輪」の頂点に留りつづけることは、人の子である限りはたとえ王侯であってもかなわぬことである。しかし神に選ばれた者であるサムソンがかくも低く落ちるとは。サムソンの父親マノアの言葉によってこの点を確認してみよう。

Man. O miserable change! is this the man,
That invincible Samson, farr renown'd,
The dread of Israels foes, who with a strength
Equivalent to Angels walkd thir streets,
None offering fight; who single combatant
Duelld thir Armies rankt in proud array,
Himself an Army, now unequal match
To save himself against a coward armd
At one spears length. O ever failing trust
In mortal strength! and oh what not in man
Deceivable and vain!

(340-50)

マノアの言葉も、無敵の強者として名声高く鳴り響いていたサムソンが、その栄光の座から一瞬のうちにす

べり落ちたこと、今は全くみじめな存在となって敵の嘲笑的となっていることへの嘆きである。

それではサムソンはどのような高さから落ちたのか、彼の栄光の日々とはどういうものであったのかを見てみる必要があるだろう。それは引用したマノアの言葉にもすでにあるように、イスラエルの民の支配者であるペリシテ人にとって恐るべき敵であったということに尽きる。それもたった一人で。敵側の堂々たる戦列をしいた軍勢に対して、サムソン単身で一軍としてわたりあえたのである。その戦果を具体的に描写するのはコーラスである。彼の力強さはライオンに例えられる。

Irresistible Samson? whom unarmed
No strength of man, or fiercest wild beast could
withstand;
Who tore the Lion, as the Lion tears the Kid,
Ran on embatteld Armies clad in Iron,
And weaponless himself,
Made Arms ridiculous, useles the forgery
Of brazen shield and spear, the hammerd Cuirass,
(126-32)

彼は身を鎧い、兜をかぶり、自慢の武器を持つ敵軍に対して、素手で、時にはふと見つけてひろったものを武器にして戦った。

Then with what trivial weapon came to hand,
The Jaw of a dead Ass, his sword of bone,
A thousand fore-skins fell, the flower of Palestin
In Ramath-lechi famous to this day:
(142-5)

あるいはその力を誇示するためにガザの門を肩にかついで、遠くヘブロン of 丘まで運んでいったこともあった。

Then by main force pulld up, and on his shoulders
bore
The Gates of Azza, Post, and massie Bar
Up to the Hill by Hebron, seat of Giants old,
No journey of a Sabbath day, and loaded so;
Like whom the Gentiles feign to bear up Heav'n.
(146-50)

このような肉体的な力強さ、その誇示というものは、その見事に打たれ賞賛の念を抱いて眺めている間は確かにすばらしいが、一度視点を変えてみるとどうであろう、小羊を裂くようにライオンを裂く姿、死んだ

ろばのあごの骨をふるって一千人もの精鋭をたおす姿は戯画そのものではないだろうか。そしてガザの門をかついだ姿は「異教徒たちが天を支えていると想像している」アトラスに例えられている。アトラスはギリシャの神々の中の巨人族であり、それはやがて登場する 'The Giant Harapha of Gath' (1068), 巨人族の裔ハラファに重なっていく。ハラファの登場は先のことはあるが、そのハラファの姿から逆に若き日のサムソンを振返ってみよう。虚栄心のかたまり、口先だけのこけおどしのハラファの姿は、読者にはほとんど滑稽なものとしてうつるだろう。かつて英雄であった時のサムソンは実はこのハラファの姿からさほど遠くはなかったのではないだろうか。ハラファは自らの言葉ではペリシテ人の英雄であるらしい。しかし読者の前に登場してくる彼は見栄っばりの実体のない存在で、笑うべき相手でしかない。それと同様にかつてのサムソンも笑うべき存在ではなかったかということに気づかされる。サムソンは現在、すでに見てきたように蔑まれ他人の意のままに翻弄されている。そして敵の嘲笑の対象である。そういう自らをフールと感じとっているが、実は彼がイスラエルの英雄であった時も、つまり彼の言う栄光に包まれていた時でさえも、実は笑われるべきフールでしかなかったのではないのか、それが実像ではなかったのだろうか。そして現在のサムソンの姿のみじめさは、サムソン自身、コーラス、マノアを、何と低く落ちたものか、比べるものなき栄光の高みから、逆境の最も深い所へまでこのように落ち得るものかと嘆かせたのであったが、本当にそのような大きな距離を落ちたのであろうか。サムソンには測り知れぬほどの距離と思われたが、実はほんの一步、一個のフールの座から別のフールの座へのほんの一步落ちたにすぎなかったのではないだろうか。それは丁度『リア王』において、グロスターがドーヴァーの目もくらむほどの絶壁から墜落したと信じこんでいたのが、実はほんの数歩の距離を落ちたのに過ぎなかったように。悟らなければならない知識はすぐ手近にある。しかしそれを手に入れるためにグロスターはあらゆる苦しみを味わい、遠廻りをし、そして絶壁から落ちなければ、落ちたと思わなければならなかった。このことはサムソンについても言い得ることである。ましてや彼自身の実像はサムソンの最も受入れ難いものだからである。誇り高いサムソンにとって、かつての自分が滑稽な存在であったなどということを受入れられようか。そうでなければ彼が現在の境遇をここまで嘆くはずはない。しかし彼は受入れざるをえない。現

在の自分の姿がフールであるならかってのもそうであったこと、そして多分未来もそうであること、フールとしての自分の実像を自覚していく過程、それがこの作品であるともいえるのである。

彼は神が自ら神意を現わすために選ばれた者をこのような境遇にまで落されることに対して、ほとんど信じられぬ思いを覚えるものの、その原因は自らにあることは十分にわかまえている。責める相手は自分自身しかない。彼は神から賜わった力がどこに宿るのかを妻にしつこく問われて、ついにその秘密を打明けてしまったのである。妻は彼を裏切って、彼の髪を切りとり、敵の手にわたしてしまった。

God, when he gave me strength, to shew withall
How slight the gift was, hung it in my Hair.

(58-9)

神が彼に命じたイスラエルの解放という偉業をなしとげるための力、その力がたよりなくも髪というものに託されていたのである。神話的なコンテキストの中で読まねばならないにしろ、そこにはやはり、肉体の力というものの脆さ、頼み難さということが暗示されており、改めてライオンを裂いた力、ろばのあごの骨を武器としてふるった力というものを誇らしげにした愚かさを教えている。次のような彼の嘆きはまさに当を得ているというしかないだろう。

O impotence of mind, in body strong!
But what is strength without a double share
Of wisdom,

(52-4)

文字通りに解釈すれば彼は知恵の足りないものとなり、まさにフール、愚者であると自ら認めているとも言えよう。同様に彼は次のように嘆く。

How could I once look up, or heave the head,
Who like a foolish Pilot have shipwrackt
My Vessel trusted to me from above,
Gloriously riggd; and for a word, a tear,
Fool, have divulg'd the secret gift of God
To a deceitful Woman:

(197-202)

サムソンが今感じているのは恥辱であり、そしてその恥辱の原因は「愚かな水先案内人」であった自分自身

である。自分の順風満帆の幸運を女の一言、一滴の涙のために逆転させてしまったのは、他ならぬ自分自身であるとわきまえていればこそ、‘Fool’、「愚か者」、と思わずもさざるをえなかったのである。彼の言葉は彼の真の姿をはからずも現わしているのだが、つづくセリフで彼は次のようにコーラスに呼びかける。

tell me Friends,
Am I not sung and proverb'd for a Fool
In every street, do they not say, how well
Are come upon him his deserts?

(202-5)

サムソンは自分の名が町々で歌い囃され、嘲笑の的とされているのではないかということに氣遣っているのである。他人の目に自分の姿はどのようにうつっているのか、そしてどのように喧伝されているのかということは、主人公のサムソンをはじめとしてほとんどすべての登場人物の念頭から去らぬことであり、この作品のアンダートーンとなっている。若き日のサムソンのろばのあごの骨による活躍も、‘famous to this day’ (145), 今も語り草になっていることがわかるし、ここで見ようとしているように、サムソンにとっては自分が他人の目にいかにかうつるかということは、最も気がかりなことである。サムソンを懐柔することに失敗して去ってゆくデリラの言葉の中にさえ、自分の名は将来ダンの人々、ユダヤの民の間では中傷されるであろうけれど、自分の祖国においては、最も有名な女性たちの中に数えられ、歌にも歌われるだろうという希望が述べられる。

But in my country where I most desire,
In Ecron, Gaza, Asdod, and in Gath
I shall be nam'd among the famoussest
Of Women, sung at solemn festivals,
Living and dead recorded, who to save
Her country from a fierce destroyer, chose
Above the faith of wedlock-bands, my tomb
With odours visited and annual flowers;

(980-7)

彼女のこの希望は、次に引用するサムソンの死の模様を知らされた時の、マノアの反応の裏返しともいえるものである。マノアはサムソンのなしとげたことがもたらす名声を疑わず、彼のために記念碑をたて、彼の行動を物語にも歌にも残そう、そこに人々は集りサムソ

ンの偉業をしのぶであろうと言う。

there will I build him

A Monument, and plant it round with shade
Of Laurel ever green, and branching Palm,
With all his Trophies hung, and Acts inrould
In copious Legend, or sweet Lyric Song.
Thither shall all the valiant youth resort,
And from his memory inflame thir breasts
To matchless valour, and adventures high:
The Virgins also shall on feastful days
Visit his Tomb with flowers, onely bewailing
His lot unfortunate in nuptial choice,
From whence captivity and loss of eyes.

(1733-44)

名声というものは何と裏腹なものであろう。デリラの言葉にもあるように、名声は「白」と「黒」の翼ではばたく。(973) デリラの名の高く歌われる地ではサムソンの名はそしられ、サムソンの名の高いところではデリラの悪名も高い。名声も又「運命の車輪」のめぐりにびったりと調子をあわせて高まるものであり、絶頂の時にこそ人々によって惜し気なく与えられるものであるが、凋落した者に対しては容赦なく罵声が浴せられる。しかしその人々の声こそが名声を作りあげるものであって、どんな偉業を成しとげても、人々の声がそれを誉め称えなければ英雄は存在しえないのである。それ故にサムソンは人々の目、人々の声をこれほどまでに氣遣うのであり、どのような英雄といえども人々の声に翻弄されるのである。しかしサムソンは、執拗に彼を嘖む他者の目、他者の声から完全に解放された時はじめて、神の意にかなう真の偉業をなしとげることになるのである。ただその時点に至っても、マノアとコーラスはなおも他者の目と声による名声というものの空しさに気づくことはなく、サムソンに対してもそれを求めようとするのだが。

勿論作品前半においてコーラスと対話するサムソンは深く名声にとりつかれている。再び 203-5 行の引用にもどってみよう。かつて英雄とあがめた自分を、今は人々はフールとして歌い囃し、嘲笑してはいないかとコーラスに向って質問を発した時、サムソンは自分の姿を客観視し、フールとして、道化としての実像を把握していたということとなる。しかし彼はその現実を受入れることを拒み、我慢ならぬことと目をそむける。それ故に彼の意識は死を求める方向へむかう。このようなサムソンの感情の流れはアイアス、ピロクテテス、ヘラクレスといった彼に匹敵するギリシャの

英雄たちとぴったり一致する。そこに登場するマノアは善意ある父親として、ひたすら息子の命を救いたい、みじめな境遇から救い出し、自分の目の届くところで余生を安楽に送らせたいとそれだけを願っている。彼が提案するのは、ペリシテ人の貴族たちに身代金を支払ってサムソンの身柄を請出すことであった。彼によれば、さもないければサムソンを待ちうけている運命というものは、

**this I am sure; our Foes
Found soon occasion thereby to make thee
Thir Captive, and thir triumph;**

(424-6)

ということであって、彼は凱旋の時の見世物となるのである。彼等にさんざん損害を与えた当の相手を捕えて見世物にするというのは何を意味するのか、それは彼等の奢る気持をよりあおるためにサムソンを嘲笑の対象にするということ、彼をフールにするということであろう。それではサムソンが父のさし出す身代金によって請出されたらどうであろうか。

**But to sit idle on the household hearth,
A burdenous drone; to visitants a gaze,
Or pitied object, these redundant locks
Robustious to no purpose clustring down,
Vain monument of strength;**

(566-70)

今では害もなし得ぬからというので、父に引き渡されたとしても、やっかい者としてむなしく炉辺に座っている存在であって、訪れてくる人々にとっては憐むべき対象、そして「a gaze」「見世物」になり下るのである。だらしなく髪ものび、それは記念物ではあるが、かつての無敵の力の今はむなしい証しでしかない。彼はどの道を選んでも彼の将来に待ち受けているものは、フールとして「見世物」として生きる運命でしかないのである。それ故にサムソンは現在の境遇こそは自らの「folly」(377)が招いた結果であり、当然の刑罰として受入れようとする。

**To have reveal'd
Secrets of men, the secrets of a friend,
How hainous had the fact been, how deserving
Contempt, and scorn of all, to be excluded
All friendship, and avoided as a blab,**

The mark of fool set on his front!

(491-6)

神に託された力の秘密を口に出してしまったおしゃべりの罪、口が軽いということはどのような罰に値するのか。彼は蔑まれ、侮られ、そして友人たちからのけ者にされても当然であるという納得しようとする。友人たちからのけ者にされるということは、同等の者としてではなく、はるかに劣るものとみなされるということである。即ちこうして奴隷としてひき臼をまわす身分も当然であるということではないか。そしてその額には「fool」のしるしがしるされている。即ち彼がフールであることは誰にとってもあきらかであり、自分自身にとっても否も応もない事実となったということであろう。この時点でサムソンは自分の実体を確認し受入れてしまったと言い得ると思う。この「the mark of fool」というのは何か特別のしるしを意味しているのであろうか。彼の奴隷の身にふさわしい仕事、ひき臼をまわすという仕事を与えられているために動物に立ちまじって働く、特にろばという言葉にたびたび出会うが、しかしそこから類推することは可能なのかどうかわからない。ここではそれは差し控えておきたい。

このようにして自分自身の実像を知らされ、現在の境遇を当然のこととして受入れざるをえなかったサムソンの心が、これで平静になったかというそうではなく、かえってそれ故に激しい苦悩に嘖まれるのである。彼はその苦悩を病気のたとえを使って、いかに痛みが心の中心部にまで容赦なく喰い入ってくるか、治療法のないために、いかに否応なく絶望に陥っていくかについて語り、唯一の慰めとなるのは死を与えられることであると語る。それに対するコーラスの言葉は、そのようなサムソンの苦悩を見るに耐えられず、一時は神の寵児であると思われた人々が、手のひらをかえたかの如く失脚しみじめな死をとげるのは一体どういうことなのか、神の真意はどこにあるのかと強い嘆きをなげかけるのである。

**God of our Fathers, what is man!
That thou towards him with hand so various,
Or might I say contrarious,
Temperst thy providence through his short course,
Not evenly, as thou rul'st
Th' Angelic orders and inferiour creatures mute,
Irrational and brute.**

(667-73)

神にとって人間とは一体何なのだろう。神の人間に対するなさりようは何と定めのないことか。天使については高くあげてそして高みに留めおき、より下等の動物や虫どもは低くおいて低いところに留めおくのに、何故人間だけをかくも翻弄なさるのだろうか。そして特に神が御自身選ばれ、恩寵を与えられ、得意の絶頂に登らせた人に対して、なぜ突然手のひらをかえたような事をなさるのか。

Yet toward these thus dignifi'd, thou oft
Amidst thir highth of noon,
Changest thy countenance, and thy hand with no
regard
Of highest favours past
From thee on them, or them to thee of service.

(682-6)

人間は神にとってたわむれの道具にすぎないのではないかという神に対する不信の念は、ギリシャの英雄たちに共通する悲痛な嘆きであり、又狂気に陥るリアにも共通するものである。神の人間に対するなさり様には何一つ説明が与えられない。人間はただ振りまわされてうろたえ嘆くだけである。サムソンは神に選ばれるということこそ、神の一個の道具となることなのだとすることを結局は悟っていくこととなる。彼がそれを確認する時こそ、彼に対して神が与えられたより大きい仕事をなしとげることになるのである。

彼のなしとげるさらに大きい仕事に移る前に、他の登場人物たちについても簡単にふれておきたい。マノアについてはすでに見てきたように、善意にあふる父親の提案、サムソンの身柄を身代金によって請出すということがサムソンの実像、どうころんでも「見世物」としてのフールである運命を免れることはできないということを明確化した。同様に他の二人の登場人物もサムソンの愚かさを他の面から照らし出すことになる。まずデリラとのやりとりについては、女の一言、一滴の涙に対して、神に託された力の秘密をもらってしまった愚行についての確認がなされる。コーラスとのやりとりの間に、すでにサムソンは次のように述べているが、

Soft'nd with pleasure and voluptuous life;
At length to lay my head and hallowd pledge
Of all my strength in the lascivious lap
Of a deceitful Concubine who shore me

Like a tame Weather, all my precious fleece,
Then turnd me out ridiculous, despoild,
Shav'n, and disarmd among my enemies.

(534-40)

力によって敵を平げることを誇っていた男が、快楽と愛欲の生活に懐柔されて、女のみだらな膝に力の証しである頭をのせてしまった。すると女はすっかり髪を刈りとりてしまい「おとなしい去勢された羊」の如く、力を奪いとり、滑稽な姿にして敵中に追い出してしまった。‘ridiculous’という言葉の効果によって、ここにおいてもサムソンの姿のフール性は際立ち、まして去勢羊のイメージは出し抜かれた夫という面からもそれを助けるだろう。デリラは臆面もなく、サムソンの髪の秘密をもらしたことを自分の弱さからと認め、サムソン自身がまず何としても自分に秘密をもらすべきではなかった、自分の懇願に負けてしまったことをサムソンの弱さであると言い、‘Let weakness then with weakness come to parl,’ (785)と訴える。サムソンは弱さを理由として許しを得ようとするな、すべての悪業の原因は弱さなのだからと怒るが、しかしサムソンが女の懇願に負けたのは弱さ以外の何ものでもない。ペリシテ人の高官たちの甘言や脅しに説き伏せられて、手練手管をもって夫の力の秘密をきゝだしたデリラに、サムソンは侮蔑の気持を隠さないが、しかしその手練手管に負けてしまったのは彼自身が弱かったからである。デリラの行動を責めることは自分自身を責めることであり、デリラにあびせるののしりと怒りの言葉はそのまゝサムソン自身に返ってくるといっているだろう。

God sent her to debase me,
And aggravate my folly

(999-1000)

という言葉でデリラについてサムソンは締めくくることが、まさに当を得ているといえるだろう。ましてやデリラの描く将来の図は、彼女からペリシテ人の貴族たちに頼みこんでサムソンの身を解放してもらい、共に暮そうというもので、それではマノアの身代金の案と変らぬばかりか、老後を裏切り者とすでに証明された者の手に委ねることになる。若さと力の真盛りの時、あらゆる人に愛されあがめられていた時でさえ裏切り、敵に売り渡せたのであるから、

How wouldst thou use me now, blind, and
thereby
Deceiveable, in most things as a child
Helpless, thence easily contemnd, and scornd,
And last neglected?

(941—4)

とサムソンが言う時、それは想像の上ではあるがもうほとんどリアの世界であると言えよう。

ハラファについてもすでに軽くふれたように、ペリシテ人の中での勇士としての高名を背に威張り返って、サムソンに侮蔑の言葉を投げかける姿は、かつてのサムソンの、自らなしとげた業を誇って闊歩していた姿を思い起こさせ、それがいかに空しい名声であったか、かつての自分の姿がいかに滑稽であったかを悟らせるのである。ハラファが登場する時、コーラスは次のように言う。

I know him by his stride,
The Giant *Harapha* of *Gath*, his look
Hauty as is his pile high-built and proud.

(1067—9)

巨人族の大男で、威張り返ったハラファは、サムソンの名声をきいて彼の姿を確めにやってきたのである。しかしサムソンの方からいくら挑戦を申し出ても、ハラファの方は決して応じようとはせず、そのためにサムソンの言葉はハラファを刺激するようなものになっていく。そしてその言葉に描かれるハラファは滑稽味を加えていくことになる。

I onely with an Oak'n staff will meet thee,
And raise such out-cries on thy clattered Iron,
Which long shall not with-hold mee from thy head,
That in a little time while breath remains thee,
Thou oft shalt wish thy self at *Gath* to boast
Again in safety what thou wouldst have done
To *Samson*, but shalt never see *Gath* more.

(1123—9)

Sam. Cam'st thou for this, vain boaster, to survey
me,

To descant on my strength, and give thy verdict?
Come nearer, part not hence so slight informd;
But take good heed my hand survey not thee.

(1227—30)

このようなサムソンの言葉によって浮んでくるハラフ

ァ像に、かつてのサムソンの姿を重ねてみよう。サムソン自身がすでにコーラスに向かって次のように言っているのである。

far beyond
The Sons of *Anat*, famous now and blaz'd,
Fearless of danger, like a petty God
I walkd about admir'd of all and dreaded
On hostil ground, none daring my affront.
Then swoll'n with pride into the snare I fell

(527—32)

次々と力によって敵を倒し、得意満面となり 'like a petty God,' まるでもう神気取りで闊歩し、そして一瞬の後にはその得意の絶頂からすべり落ちてしまった、そのようなかつての自分の姿を否応なくハラファの中に見なければならない。そしてハラファに対する挑戦の言葉は、そのまゝかつての自分に対する挑戦の言葉となるのである。

このような自己認識に達したサムソンをどのような運命が待ちかまえていたのであろう。つづいて登場してくるのは役人である。彼はペリシテ人の貴族たちの意向を次のように伝えて来たのである。

This day to *Dagon* is a solemn Feast,
With Sacrifices, Triumph, Pomp, and Games;
Thy strength they know surpassing human race,
And now some public proof thereof require
To honour this great Feast, and great Assembly;
Rise therefore with all speed and come along,
Where I will see thee heart'nd and fresh clad
To appear as fits before th' illustrious Lords.

(1311—8)

彼にとっては異教の神であるダゴンの祭礼で、彼の力業を見せよというのである。サムソンの力はイスラエルの民の神によって恩寵として与えられたものであったのに、それをダゴンの祭礼で、しかも、試合、行列、競技といったものと同列に見なされているということでは、祭礼の添えものの「見世物」としてということである。サムソンはかつての英雄としての自分の姿が、空威張りのフールでしかなかったことを知った。デリラの懇願に負けたことも愚かさそのものであった。身代金によって父親に請出されたとしても、人々の憐みのこもった目によって見守られる「見世物」となるだけであろう。どちらを向いてみても自分の姿はフール、人

に笑われる存在でしかないのなら、このまゝ牢に留まって、動物にまじって奴隷の仕事をしていた方がよい、その有様を人々によって愚かさを歌い囃され、嘲笑されるフールとしての存在であったとしても。ここまで自己認識したサムソンの前に持ち出されてきた未来の図は、フールとしての彼の姿の確認でしかなかった。それはまさに人々の娯楽のために待る道化としての姿であって、フールとしての自己の実像を受入れていたサムソンも、その具体化の前にたじろぎ、拒むのである。サムソンの拒否の言葉が、かえって祝祭的道化の姿を浮き彫りにしていく。

**Sam. Have they not Sword-players, and ev'ry sort
Of Gymnic Artists, Wrestlers, Riders, Runners,
Juglers and Dancers, Antics, Mimmers, Mimics,
But they must pick mee out with shackles tir'd,
And over-labour at thir publick Mill,
To make them sport with blind activity?**

(1323-8)

剣士、軽業士、力士、騎手、走者、手品師、ダンサー、道化、役者、物真似といった人々の仲間に否応なくサムソンは引き入れられていく。サムソンの拒否はますます激しい調子となる。

**Can they think me so brok'n, so debas'd
With corporal servitude, that my mind ever
Will condescend to such absurd commands?
Although thir drudge, to be thir fool or jester,
And in my midst of sorrow and heart-grief
To shew them feats, and play before thir god,**

(1335-40)

しかし彼の言葉は彼に今課されようとしている仕事、「彼等の道化」となることを確認していく。「彼等の道化」となることを拒みつづけていたサムソンが決心をひるがえし、この役割を受け入れる時、何がそうさせたのかは判然としない。彼は“I begin to feel Some rouzing motions in me” (1381-2) と言い、何か途方もないことに自分の気持ちがむかっていくと語るだけである。それは丁度キリストが神から差出された苦い盃を飲む時のように、長い逡巡の後の一瞬のことであり、ただその役割を引受けたというだけのことなのかもしれない。キリストの名を持ち出してきたのはほかでもない、キリストはサムソンの死の後、はるか時代も下って、イスラエルの民だけでは

なく人類すべての救い主としての役割を引受けるために、登場するからである。そしてキリストの姿の中に犠牲の山羊を見、嘲笑され踏みにじられる道化を見ようとするのは、決して珍しいことではない。¹⁴⁾ ローマ軍の兵士によって捕われてからのキリストに対する扱いは、あきらかに侮蔑とからかいに満ちている。ロバの背に乗ってエルサレムに入ったユダヤの王、神の子とも称しているが、それならばその証拠を見せるとからかい、そして最後にはユダヤの王ならぬ愚者の王として茨の冠をかぶせ、王座ならぬ十字架へつける。そしてキリストは甘んじてローマ兵たちと群衆の嘲笑と侮蔑にさらされ、道化の身分を受入れたのであった。もともと出発点から、人々から疎外される立場にあった最下層の人々と共にあったキリストは、愚者の王として犯罪人たちと共に十字架にかゝられた。そしてその予徴としてのサムソンも又奴隷として獄につながれ、動物にまじってひき臼をまわし、道化として扱われる運命を受入れようとしている。もしそれを神が望まれるならば。神が一個の道具としてそうであることを望まれるならば。神のいます最も高いところをめざそうとするなら、一度は最も低く膝を屈しなければならぬというキリスト教的な逆説は、ここにおいても又直実なのである。¹⁵⁾

その後のサムソンの姿は使者の言葉によってマノア、コーラスそして読者に伝えられる。使者自身、サムソンが‘to shew the people Proof of his mighty strength in feats and games;’ (1601-2) という噂を耳にして、その見世物 ‘spectacle’ (1604) を見のがすまいとして祭礼の場である劇場にやってくるのである。彼の描写する祝祭に酔う人々の様子、サムソンが彼等の見世物となるときいかに耐え忍んで、しかしひるむことなく力業をやったのけたかを少々長くなるが次に引用する。

**The Feast and noon grew high, and Sacrifice
Had filld thir hearts with mirth, high cheer, and wine,
When to thir sports they turnd. Immediatly
Was Samson as a public servant brought,
In thir state Livery clad; before him Pipes
And Timbrels, on each side went armed guards,
Both horse and foot before him and behind,
Archers, and Slingers, Cataphracts and Spears.
At sight of him the people with a shout
Rifted the Air clamouring thir god with praise,
Who had made thir dreadful enemy thir thrall.
Hee patient but undaunted where they led him,
Came to the place, and what was set before him
Which without help of eye, might be assayd,**

To heave, pull, draw, or break, he still performd
All with incredible, stupendious force,
None daring to appear Antagonist.

(1612—28)

しかしその後、アーチ型をした屋根を支える二つの太い柱に両腕をかけて休息をとった時にこそ、彼は自ら進んで、神から与えられた力のすべてをこめて一つの技を演じたのであった。今まで見せたどんな力業よりも偉大な技を。今度は神一人に見せるために。そのサムソンのなしとげたことを、セミ・コーラスはペリシテ人に対する復讐ととっているが、復讐という考えが、二つの柱を押し倒したサムソンの頭の中にあったとは思われない。サムソンが自己認識をはたし、自分の真の役割を受け入れた時、コーラスもマノアも、そのことまでサムソンと共にすることはできなかったのである。しかしセミ・コーラスがサムソンをフェニックスにたとえる時、我々はそこに再びキリストの予徴としてのサムソンの姿を見るであろう。

Like that self-begott'n bird
In the Arabian woods embost,
That no second knows nor third,
And lay ere while a Holocaust,
From out her ashie womb now teemd
Revives, reffourishes, then vigorous most
When most unactive deemd,
And though her body die, her fame survives,
A secular bird ages of lives.

(1699—707)

ここにはあきらかに復活のキリストの姿を見ることができだろう。そして栄光の座から、かくも低く奴隷の身分に落ちたことを激しく嘆いていたサムソンが、実はかつて栄光に輝いていたと思っていた時でさえ、決して高いところにあったのではなかった、現在の身分はほんの一步すべり落ちたに過ぎないと悟り、さらに低く嘲笑、侮蔑の与えられる身分を自ら選びとった時にこそ、サムソンは真に高く翼を駆って飛び、上昇することが可能となったのである。真の栄光に向って。

(以上は昭和54年12月15日、十七世紀英文学研究会関西支部第54回例会において口頭発表したものに加筆したものである。)

注

- 1) *The Poms of John Milton*, ed. John Carey

and Alastair Fowler, Longman 中の John Carey 注による *Samson Agonistes* の introduction 参照。様々な解釈を簡潔に紹介している。

- 2) *Samson Agonistes, Sonnets, etc.*, ed. John Broadbent and Robert Hodge, Cambridge University Press 中の John Broadbent による 'Introduction to *Samson Agonistes*,' p. 148 参照。ただし Broadbent はサムソンは周縁的存在以上のものであると言っている。

- 3) 山口昌男氏の著作は多岐にわたるが、主題を拙稿に関係のあるものに限れば、『道化の民族学』, 新潮社, (1975), 『道化的世界』, 筑摩書房, (1975), 『知の祝祭』, 青土社, (1977), 『道化の宇宙』, 白水社, (1980), 等である。

- 4) Anthony Low, *The Blaze of Noon: A Reading of Samson Agonistes*, Columbia University Press, 1974, chap. 3, 'Tragic Patterns.'

- 5) 引用はすべて *The Poetical Works of John Milton*, vol. II, ed. Helen Darbishire, Oxford, (1955) による。

- 6) イーニッド・ウェルズフォード, 内藤健二訳, 『道化』, 晶文社, (1975)

- 7) ウィリアム・ウィルフォード, 高山宏訳『道化と笏杖』, 晶文社, (1983)

- 8) 注3参照。

- 9) 内藤氏は『道化』の本文においては「愚者」という訳語を用い、高山氏は『道化と笏杖』の本文においては「フール」という言葉を用いている。

- 10) 『士師記』におけるサムソンの謎かけ等は、トリック・スター的要素と考えられるが、ミルトンがそういう点をこの作品に採用していないことはあきらかである。

- 11) 前出。特に pp. 35—45

- 12) Lillian Feder は *Madness in Literature*, Princeton University Press, pp. 95-7 においてソポクレスの『アイアス』について論じているが、同じ作者の他の作品については触れていない。まさに「狂気」に主題を限っているためと思われる。

- 13) 前出, p. 54. なおLow も掲げているが, *Samson Agonistes*, ed. A. W. Verity, Cambridge, 1922, 'Introduction', p. liv に同様にプロクテスへの言及がある。

- 14) 前出。ウィルフォードは第十四章「愚行共和国と聖なるフール」においてキリストのフールの要素を論じている。同様に前出。『道化的世界』中の第三

部「道化的世界」において山口氏は、「道化キリスト再来」という章を設け、キリストの一面を論じている。なお氏もその名を揚げているハーヴィー・コックスは、その著書『愚者の饗宴——「遊び」と「祭り」の神学——』、新教出版社、(1971)の第十章「道化キリスト」において、同様の説を展開している。

15) 前出, pp.57-61 においてLow はキリストとサムソンを比較し、又キリストにhumiliationと self-sacrifice の典型を見ている。なお藤井治彦氏は、『樂園喪失——思想としての空間——』、研究社、(1983)の第一章「上昇と下降」において、キリスト教の精神を上昇・下降運動の面から論じている。